

この世に
損も得もない

私は親から説教されたことがない。昔の大人は忙しかったので、いつも放っておかれたからである。しかし、妹とケンカしたり、お使いに行くのをぐずったりすると、必ず言われるコトバはあった。それは、「損も得もない」である。

私は三人兄妹の真ん中だった。我慢するのは、いつも姉である私で、一番美味しい物は長男である兄の方へもってゆかれる。なにか納得できないと思っていたのだろう。私だけが損をしていると母に訴えると、「この世に損も得もない」と怒られた。

最初は理不尽なことを言うなあと思っていたが、よくよく考えてみれば本当にそうかもしれないと思えてきた。兄は小さい時、チョコレートを欲しがるまま食べさせられて、気持ちが悪くなり、その後、

チョコレートを食べられなくなってしまった。一見、得に見えることも長い目で見ると、それが損か得かなんてよくわからない。つきつめれば、たいていのことは、死に際になってみると、「まっ、どっちでもいいか」ということになるのではないだろうか。

街は商品があふれて、お金は万能になってゆく。お金だけが人間関係をつないでいたりすることもある。損か得かを瞬時に判断できる人は賢い人だと思われる。今だけ半額、と言われると、自分だけが損をするのではないかと体が前のめりになる。みんなが目の前の損得で一喜一憂している。子供の頃、読んだ本の中では、そういう人たちは、たいてい痛い目にあっていた。花咲かじいさんの隣のおじいさんのように。みんな、そんな話を忘れてしまったのだろうか。

一度、損を引き受けてみるというのは、どうだろう。人からはバカにされるかもしれないけれど、世間の物差しでははかれない価値観が見えてくるかもしれない。そういうものが、まだこの世にあると知るのには、人生にとっては、得なことである。



撮影：原田奈々

夫婦で共同執筆の脚本家・小説家。ともに兵庫県生まれ。主に夫がネタを探し、妻が執筆するという役割分担。ドラマ作品に「やっぱり猫が好き」(第2シーズン1990～1991年、スペシャル版2005年)、「すいか」(2003年)、「Q10」(2010年)、自身の小説を原作とした「昨夜のカレー、明日のパン」(2014年)など。著書に、「木皿食堂2 6粒と半分のお米」(双葉社)など。